

## 引用句の連接について

辻本 桜介

### 1. はじめに

「～と言う」「～と思う」等の形によって語句を引用する文(引用構文)では、通常、次のように引用句「～と」が述語に対して1つだけ現れる。

- (1) a. 太郎は「いたいよー」と言って泣き出した。  
(BCCWJ・川上真理『カッとなって子どもを叩かない法』)
- b. 楫取、「今日、風、雲の気色はなはだ悪し」といひて、船出ださずなりぬ。  
(土佐・二月四日・44)

その一方で、1つの述語に対し引用句が2つ連接して生起する場合がある<sup>1</sup>(以下の例では適宜番号や下線を付し、筆者による注を[ ]に示す)。

- (2) a. 比嘉さんは、いじめにあった経験を紹介。<sup>①</sup>「いじめられる人もかわいそうだが、同じ人間の痛みがわからないいじめる人もかわいそう」と、<sup>②</sup>「保母になって、心やさしい人を育てたい」と話した。  
(琉球新報・2013年6月4日)
- b. 何よりも、今、若者のひきこもりの支援とか若者の支援というのは、全体の風潮として、国の経費というイメージを受けます。支出であるというイメージを受けます。自分の友人からも言われます。<sup>③</sup>何でそんなところに自

<sup>1</sup> 次のように、3つ以上の引用句が連接することもあるが、本稿では取り扱わない。ただし、こうした例の多くは2、4で検討する、1つの発言・思维の内容を分割的に提示する用法と捉えられる。

- (i) 現実には契約書はあるということはわかったわけでしょう。<sup>①</sup>あなたの方はないと言っているけれども現実にはこういうふうにあったじゃないですかと、<sup>②</sup>現実にはこういうように公表されているじゃないですかと、<sup>③</sup>これは契約書なんですか、何なんですかと、<sup>④</sup>やっぱりそれは職務上きちっとやっていたらいいと、法律に基づいてきちっと措置をしていただかないと、これは職務ですよ、あなたの方の。それをきちっとやっていたらいいと困ると私は言っているんですよ。どうなんです。(参議院・1976年10月26日)
- (ii) 入なかの折の[=人の往來の激しい街中での]御住居だに、猶我御心には勝れて見えおぼさる[弁の君の]御有様の、まいてさる山の長谷の辺りにては、光るやうに見え給に、<sup>①</sup>「あないみじ。これを人に見せばや」と、<sup>②</sup>「見るかひあり、めでたのただ今の有様や」と、<sup>③</sup>「人の子にて見んに[他人の子供と見るとしたら]、羨しくも持たらまほしかるべき子なりや。みめ・容貌・心ぼせ・身の才いかで[こんなに素晴らしく]ありけん」と、あはれにいみじうおぼさるるにも、御涙浮びぬ。(栄花・二十・下257)

分の大切な税金を使わなきゃいけないんだと、<sup>②</sup>だったらおれも苦しいと言われます。 (衆議院・2009年4月24日)

- (3) a. 帯刀、面白の駒のことを妻に語りければ、[衛門は]した心には、「いみじうねたかりし答すばかりの身にも「非常に憎かった北の方への報復ができるほどの身分にもなりたい」など思ひしるしにや」と、うれしけれど、<sup>①</sup>「あないとほしや。北の方いかに思すらむ」と、<sup>②</sup>「[北の方に]さいなまるる人多からむかし」と言ふ。 (落窪・二・166)
- b. とかく言ひしろひて、[女君が]この御文はひき隠したまひつれば、[大将は]せめてもあさり取らで、つれなく大殿籠りぬれば、胸はしりて、<sup>①</sup>いかで取りてしがなと、<sup>②</sup>御息所の御文なめり、何ごとありつらむと、目もあはず思ひ臥したまへり。 (源氏・夕霧・4-430)

(2)は現代語の例、(3)は古代語の例であるが、いずれにおいても引用句が文中に2つ連続して現れ、ともに二重下線部の述部に係っていると見られる。藤田(2000)は、「通常、引用句が1つの述部に対していくつも係っていくことは、強調して並列するような場合は別として不自然になる」とし、次のような例を挙げている。

(4) ?おはようと 朝は何を作ろうかと考えていた。 (藤田2000:352)

(5) ?今日は暑いなと 天にまします我らの父よ……と読んでいた。 (同)

(2)(3)のような例がある一方で、(4)(5)のように許容されない場合もあるが、どのような条件下で引用句が接続する表現が許容されるのだろうか。

他方、同じ助詞でマークされる成分の重複が許容されるか否かという問題としては、現代語の二重ヲ格制約がよく知られているところと思われる。例えば新屋(1995)では、ヲ格成分の重複が許容される場合、2つのヲ格のうち少なくとも一方が随意格になることが示されている。

(6) a. \*花子を顔を殴る。 (対象格のヲ+対象格のヲ、新屋1995:12)

b. ?太郎を家を追い出す。 (対象格のヲ+起点格のヲ、同:17)

c. 嵐の中を家を出た。 (場所格のヲ+起点格のヲ、同)

(6a, b)では、述語に対し必須格に立つヲ格(対象格・起点格)が接続しているため容認されないが、(4c)では述語に対し随意格に立つヲ格(場所格)が含まれるため許容されるというのである。

これに対し(2)では、「話す」「言う」のように発言を表す動詞が用いられ、引用句「〜と」はその内容を表す必須成分として機能するものと考えられるが、2つ連続して共起している。また、古代語の(3)に関しては内省判断はできないものの、「言ふ」「思ひ臥す」のように発言・思惟を表す述語は引用句を必須成分として要求するものと思われる。2つの引用句がともに同じ1つの述語に係る構造を取っているならば、これはヲ格成分の場合とは異なる振る舞いを示していることになるのではないだろうか。本稿では、こ

のように、1つの述語に対し引用句が2つ接続して共起する表現の統語的性質について考察を行う<sup>2</sup>。なお、2つの引用句の間に別の要素が間に割り込むものは引用句が接続しているものとはみなさないが、議論の都合上、2、3及び2、5においてそうした表現にも触れる。

次節以降の構成は次のようにする。まず2節では現代語において検討を行い、1つの述語に対し2つの引用句が現れる形が、統語的に異なる4つの構造で成立することを述べる。3節では、古代語において引用句が接続する例を取り上げ、現代語で示した構造と比較する。4節は本稿のまとめである。

## 2. 統語的観点による分類

本節では、現代語において1つの述語に対し2つの引用句が生起する形を検討し、統語的に異なる4つの構造においてそうした形が成立することを示す。すなわち、(A) 言い直し、(B) 第Ⅱ類引用構文、(C) 等位構造縮約、(D) 副詞的成分の接続、という4つの構造である。このうち、2つの引用句が接続する形を取るものは(A)・(B)・(D)であり、(C)では2つの引用句の間に他の成分が割り込んで生起するため、引用句が接続する形にならない。以下、順に見ていく。

### 2.1 (A) 言い直し

同じ資格の成分が接続するケースの1つとして、言い直しの表現がある。

(7) ①あなたの今の考えを、②あなたの気高い意志を、ママは、評価するわ。  
(BCCWJ・新井素子『緑幻想』)

(8) 一生懸命片隅に追いやり、①いつか消滅することすら望んでいたその感情に、  
②消えかけた感情に、今は自分の中から消えないでくれと懇願している。  
(小説を・舞崎柚樹『object maker』)

(9) しかし、①民間がやるからには、②民間が設備投資の主体であるからには、資金回収できなかつたら喜んで設備投資しませんわね。  
(参議院・2002年3月14日)

(10) ①無為に暮らすことの、②怠惰に過ごすことのどこがいけないのか、今のお塚には解らぬ。  
(京極夏彦『覗き小平次』)

(7)(8)はそれぞれヲ格の名詞句と二格の名詞句が接続しており、1つ目の名詞句と2

<sup>2</sup> 次のように係助詞を伴って「～とも～とも」という形を取るものは、本稿では考察の対象から除く。

(i) 65歳の母の左ひざに水がたまってしまい痛くてつらそうです。<sup>1</sup>「一度水を抜くとクセになる」とも、<sup>2</sup>「抜けばすっかり痛みが消える」とも聞きます。(BCCWJ・Yahoo!知恵袋)

つ目の名詞句は同じ事柄を指している。(9)は同じ内容の「～からには」という理由節が接続しており、(10)も同じ内容の「～ことの」という連体修飾語が接続している。これらの例では、1度述べた語句を言い直すことで直後に同じ事柄を表す語句が接続して現れているものと捉えられ、また、こうした言い直しが格成分・従属節・連体修飾成分といった種々の要素に関して起こることが確認できる。

このことから、言い直しの表現は、引用句「～と」においても起こることが想定される。次のような例は「～と」の言い直しと考えられる。

- (11) 普段ならこの言葉が「お前のせいじゃない」と、私の重荷をおろしてくれるものだとわかっている。でも今の私には①「お前は どうでも いい」と、②「お前のためじゃない」と、そう言われている気がして——目の前のアレクセイをものすごく遠くに感じた。

(小説を・水無月優『召喚は間違いだったようです』)

- (12) それから、今、直接民主制、この前の吉野川の可動堰の話もそうでありますけれども、大変高く国民は評価しておって、①何でもかんでも言うならばもう国民投票にかけると、②直接投票制度にかけると、こういうふうなムードもあるようですけれども、果たしてそれでいいのかどうか。

(参議院・2000年3月3日)

- (13) ですから、①人員も、先ほどの申請事務も、停滞することなく強化をしてきたと、②体制もかなり強化されてきたと感じますよ。いよいよという中でね。

(東京都議会・2003年7月3日)

- (14) ①これから先頑張って行政の改革もするんだと、②見直しをするんだと言っていますけれども、これは結局できないと思いますよ。

(参議院・2002年4月4日)

- (15) 君は僕に①「すまない」と②「顔向けができない」と思ったのだろうか？僕が今でもそう思って、眠れない長い夜を過ごしているように……。

(小説を・三小屋真尋『君の目をみて いえること』)

(11)の1つ目の引用句における「お前は どうでも いい」という内容と、2つ目の引用句における「お前のためじゃない」という内容は、ほぼ同じことを言っているものと解される。(12)～(15)も同様である。すなわち、現実において発言された、または心中に抱かれた言葉を、1つ目の「～と」に引用する際と、2つ目の「～と」に引用する際とで、若干形を変えていると見ることができ、(7)～(10)のような言い直しと同様に捉えることができるのである。「～と」においてこのような現象が起こることについて、藤田(2000)の「話し手投射」という概念を援用しつつ、少し詳しく考えてみることにする。

まず、話し手が引用句を用いて何らかの語句を再現しようとする時、通常は元の発言・思惟の語句を一言一句まで忠実に再現する必要はない。

(16) a. ——相手方に電話確認していいか問題な場面で

主任「いいから早くきいてみる！」

b. 部下「おい、主任は『すぐ電話しろ』と怒鳴ってるぞ。かまわないからかけろ」  
(藤田2000:159-160)

(16)は、主任の発言を部下が他の社員に伝えようとしている場面である。部下は、主任の発言である「いいから早くきいてみる！」の意味を解釈し、「すぐ電話しろ」という異なる形に変えつつ、なお主任の発言として提示している。ここにおいて、部下は主任の発言である「いいから早くきいてみる！」という語句を忘れていたわけでもなく、また嘘をつくつもりで元の発言と異なる「すぐ電話しろ」という語句を伝えたわけでもない。藤田(2000)は、このように、引用対象の語句が話し手という解釈者による意味解釈を経て再現・提示されるというメカニズムを「話し手投射」と呼ぶ。話し手投射を考慮すると、再現対象のある語句に対し、引用句「～と」において表される再現結果は、再現者である話し手の意味解釈や意図次第で何通りにもなりうるものと言える。例えば(16)に続く場面において、部下の周囲の社員が、部下の台詞を聞いたにもかかわらず相手方に電話確認しないですると、その状況に対し部下が続けて次のように発言することもありうる。

(17) 部下「何やってるんだ、主任は『電話してかまわない』と言ってるんだよ。  
早く電話しろ」

この発言における「電話してかまわない」も、(16)の「すぐ電話しろ」と同様に、再現対象である主任の発言「いいから早くきいてみる」を部下の解釈を通して再現したものと言える。すなわち、(16b)の「すぐ電話しろ」と(17)の「電話してかまわない」は、同じ(16a)の発言「いいから早くきいてみる！」が話し手である部下の解釈を通して述べられたものであり、1つの発言に対応する引用句が2通り現れたものと考えることができる。

以上のように、話し手投射によって元の発言が幾通りにも再現されうることを考慮すると、引用句「～と」に言い直しの表現がありうることに説明がつく。すなわち、話し手はある再現対象の語句を解釈し、まず一度「～と」において解釈内容を再現結果として示す。そして、その再現に不十分さを感じるなどの事情によって、もう一度その再現対象の語句についての自分の解釈内容を再現結果として2つ目の「～と」に示すのである。(11)～(15)はそうした表現として理解されよう。

なお加藤陽子(2010)は、現代語において収集した話し言葉のデータから「引用部並列系」として次のような例を挙げている。

(18) えー前任者がどう、あれ、①少しでも、信頼できるような、行政を進めていきたいと、②身を引き締めて、やっていきたいと思います。

(加藤陽子2010:83、下線・番号は筆者)

(18)では、2つの「～と」の引用語句末尾において「たい」(二重下線部)が共通して現れている。加藤陽子(2010)は、このように2つの引用句の内容のモダリティが共通する点を「引用部並列系」の特徴として挙げている。これまで見てきたことから分かるように「引用部並列系」の例におけるこのような特徴は、2つ目の引用句が1つ目の言い直しになっていると考えることで説明がつかさう<sup>3</sup>。

## 2. 2 (B)第Ⅱ類引用構文

続いて、引用句の連接する形を取る構造として次の(19)のようなパターンを見る。

- (19) 當山さんは亡き妻の夢をかなえるため、一カ月後に野球部に復帰。そして5月、念願の本大会出場を果たした。出発の前に「病氣と闘っている人たちに頑張ってもらいたい」と「妻の強さを私の力にかえ、力強くプレーしたいと思います」と思いをこめて、本紙に投書した(7月19日掲載)。

(琉球新報・2000年7月25日)

これは、1つ目の引用句「～と」(一重下線部)が、後続する「～と 述語」(二重下線部)というひとまとまりの述語句全体と並列的な構造をなすものと考えられる。これについて、以下少し検討を加える。

藤田(2000)は、引用構文をその述部の意味に基づき第Ⅰ類と第Ⅱ類の2つに分類している。

- (20) 〈第Ⅰ類引用構文〉誠は、こんにちはと言った。(藤田2000:29)

- (21) 〈第Ⅱ類引用構文〉優はお疲れさまと肩をたたいた。(同)

(20)のように、引用句「～と」の部分が表している発言(または思惟)が、述部の表す発言(または思惟)と、事実上一致しているものが第Ⅰ類引用構文であり、(21)のように、述部が引用句「～と」の部分が表す発言(または思惟)とは別の事態を表すもの

<sup>3</sup> なお、2つの引用句が言い直しの関係にあるとは見なしがたい場合でも、両者に共通するモダリティ形式が現れやすいように思われる。次の(i)(ii)においては、2つの引用句の内容を、同じ1つの発言(または思惟)に対応するものと解することは難しいが、共通するモダリティが現れている(二重下線部)。

(i) しかしながら、今お聞きいただきましたように、<sup>①</sup>スキーリフトのこういう許認可は割合に簡単に撤廃できるんじゃないかと、<sup>②</sup>やってもそうそう大きく影響はないんじゃないかと思うんですね。(参議院・1986年4月21日)

(ii) ただし、中国が常に言っているのは、<sup>①</sup>みずから先に核を使うことはしませんと私たちは言っているんですけど、<sup>②</sup>そしてほかの国に比べれば実験の数は少ないんですけど言っているんですけども、一番最近に核実験をされているのが中国であるということでありまして、現実にやっぱり核があるということですね。(参議院・2004年6月23日)

2. 4で述べるように、本稿ではこうした例を、副詞的成分が連接する現象の一環として捉え、一続きの発言・思惟の内容が分割されたものとするが、ひとまとまりの発言・思惟の内部においては発言主体・思惟主体の態度・感じ方が一貫しているのが普通であると思われる。そのことが、2つの引用句に共通のモダリティ形式が生起することに繋がるものと考えられる。

が第Ⅱ類引用構文である。そして、第Ⅱ類引用構文は、引用句の部分が表す発言（または思惟）と、述部の表す事態とが、同一場面において共存する別の行為になるとされている。

これを踏まえ(19)を見ると、1つ目の引用句（一重下線部）の表す思惟は、後続する述部（二重下線部）全体の表す事態と共存関係にあるものと捉えられ、第Ⅱ類の構造で理解される<sup>4</sup>。そして、述部（二重下線部）自体もまた引用構文になっており、重層的な構造をなすものと分析される。やや判定の難しいところであるが、このような構造として分析できる例を次に挙げる。

- (22) もとと私の私は、マイナス思考で、後ろ向きで、人見知りで、上がり症でと、ネガティブにも程がある性格だったんですが、「これではマズイ」と、「もっと前を見よう」と決意した結果、少しのプラス思考が現れたんです。

（小説を・アッハッハ『フィクションとノンフィクションの狭間で』）

- (23) そもそもこれは、エベレスト登頂から帰ってく麓の村でリングを振る舞われた記憶から始まっています。生鮮食料品に飢えていましたから、嬉しくっておいしくって、ああ、「登らせてもらったならなんかしなくちゃ」と、「私にやれることはないかな」と考えていました。

（BCCWJ・田部井淳子『いらぬ日本、いる日本』）

- (24) ゲッパート議員にも江沢民主席は、人権抑圧というのは米議会の認識不足だと暗に指摘。「米中の経済的な相互補完性は大変に大きく、大きな協力の分野がある」と、「人権にこだわるか、市場か」と経済カードをちらつかせた。

（毎日新聞・1994年1月17日）

(22)(23)の述部（二重下線部）は第Ⅰ類の構造を取り、(24)の述部（二重下線部）は第Ⅱ類の構造を取っている。こうした重層的な形で引用句が接続する文<sup>5</sup>が成立する条件は、1つ目の引用句が表す発言・思惟が、2つ目の引用句の表す発言・思惟と同一場面において共存することである。すなわち、同一主体が同時に2つの言語行為を行っている

<sup>4</sup> 次のような例は、第Ⅰ類引用構文を重ね合わせた構造として理解できる可能性がある。

- (i) 宝くじ研究家の山口且訓（かつのり）さんは、結論は銀行の説明と同じだと前置きしつつ、「二十年間高額賞金の当たりが出ていない売り場で買うよりは、たくさん当選が出ている売り場で買ったほうが楽しいじゃないですか」と「楽しんで買い続けることが大切」と主張する。

（毎日新聞・1993年1月31日）

第Ⅰ類の構造をなす二重下線部を、ひとまとまりで1つの発言行為を抽象的に表すとみて、その具体的な内容を1つ目の引用句（一重下線部）において提示しているという解釈が可能ではないかと考えられる。ただし、2. 4で述べる構造、すなわち副詞的成分が接続する現象の一環として捉え、1つの発言を2つに分割して示す表現として理解することもできる。本稿では、第Ⅰ類でも重層的な構造がありうるという可能性を指摘するに留めたい。

<sup>5</sup> 第Ⅱ類引用構文の述部にさらに引用構文が組み込まれる構造では、引用句が接続する形を取る場合もあるが、次のように2つの引用句の間に別の語（波線部）が生起する場合もある。

- (i) 「夢だからあんなに凄いな爆発だったのか…」と私は「っホォ〜」と胸を撫で下ろした。

（小説を・多茅春人『蒼月の海』）

いう場面を描く場合にこうした表現が用いられることになる。使用できる場面が限られていることから、実例を見ることは稀である。

以上に関して、藤田(2000)は「意図引用」とするタイプの構文に言及している。意図引用とは、「引用句に引かれる心内の思惟が述部に示される行為をひき起こす引きがね・動機であるような意味関係において、引用句と述部とが結びつく」(藤田2000:350)タイプのもので、やはり第Ⅱ類引用構文のひとつのあり方として捉えられるものである。

(25) 論文を書こうと原稿用紙を買った。 (藤田2000:353、下線筆者)

(25)において、「論文を書こう」という思惟は、後続する「原稿用紙を買う」の表す行為の動機であると言え、意図引用の典型的なものと理解される。その上で藤田(2000)は、意図引用の場合には引用句が重なる構造が起りやすいことを指摘している。

(26) なるべく怒らさないでおこうと 済みませんと謝った。 (藤田2000:352)

(26)では、「なるべく怒らさないでおこう」という心内思惟が、「済みませんと謝る」という行為を起こす動機を言い表したものと言える。(23)などもこうした意図引用と同様の解釈ができるだろう。ただ(24)では、1つ目の引用句が心内思惟ではなく発言を表すという読みが可能であるように思われる。

意図引用と判定できるか否かは措き、本項では、第Ⅱ類引用構文の述部にさらに引用構文が組み込まれることで引用句が接続する文が成立するというを確認した。

## 2. 3 (C) 等位構造縮約

次に、従属節の述語句が省略される現象について見る。

(27) a. そしてこの前のように、仲間にはひかるとヨーコをΦ、ひかるとヨーコには仲間たちを、紹介した。

(BCCWJ・玉岡かおる『なみだ蟹のムーンライト・チアーズ』)

b. パンは3枚一組にし、2枚には片面にΦ、残り1枚には両面にバターを薄く塗る。(BCCWJ・『オレンジページ』2001年4月17日号)

(27)では、文中に現れた述語は1つであるのに対し、同じ格成分が2つ生起している。このような文は、次の(28)のような、従属節と主節の述語句とが重複している並列文から、従属節の述語句を省略することで得られる。

(28) a. そしてこの前のように、仲間にはひかるとヨーコを紹介し、ひかるとヨーコには仲間たちを、紹介した。

b. パンは3枚一組にし、2枚には片面にバターを薄く塗り、残り1枚には両面にバターを薄く塗る。



2つの事態を並列する複文において起こるこのような省略現象は、等位構造縮約<sup>6</sup>と呼ばれる。拙稿(2014)でも触れたが、次のように、引用句を取る述語においても等位構造縮約は起こる。

- (29) 父は私に「お前はなぜ男ではないのか」とφ、母には「なぜリタを男に産まなかったのか」と言い、時には母からも当たられて私は十歳まで育ち、弟が産まれてようやく重圧から解放された。

(小説を・むぎ『ブリューテ・ドウタ』)

- (30) ヴェーチャーカーは、国家政治局と改称した。頭文字をとり、GPU(ゲーベウー)と略称された。いまや大きな秘密警察機構となっていた。組織名は変わっても、人民は変わらずこれを「チャーカー」とφ、その構成員を「チェキスト」と呼びつづけた。(小説を・田中鉄也『フェアリー・テール』)

- (31) ちなみに春乃さんは「よろしくねばあちゃん」とφ、高瀬さんは「俺が世界を背負う男だ」と失礼な態度を続けるが、首長さんは「こちらこそ」とニコリと頭を下げる。

(小説を・天乱丸『勇者が仲間になりたそうにこちらを見ている』)

- (32) 三つのことに苛立ち焦っている俺を無視して、仁藤は「お待たせして申し訳ございませんと、小坂と若林に丁寧にφ、そして俺には「バイクは裏の車庫に停めた。鍵は俺が預かっている」と突き放すように告げた。

(BCCWJ・日明恩『鎮火報』)

- (33) ならば、この「い」でアルファベット二文字とは考えられないだろうか。そうすると片方を「L」とφ、もう片方を「I」と読むことができる。「ELICA」、読みは「エリカ」誰にでも解けそうな簡単な『略号』だ。

(小説を・aoringo『能力者は赤信号を認めない～彼らの遅すぎる青春～』)

- (34) その噂を聞きつけた全国の陸上競技連盟のお偉いさん等々が、これまでに大挙して幾度となく彼らを勧誘にやって来た。が、その度に煌侍は「妹達との時間が減るから絶対ヤダ」とφ、瑛時は「剣術の鍛錬の時間が減るので断る」と突っぱねて来た。(小説を・犬飼BGL『のとこん～not complex～』)

- (35) 作者の山本哲也、略して山哲です。えーと、この作品、もう結構古いので(2001年の作品)書いてある内容が今の実情と相当ズレているところもありますが、そのへんは、その時代を知っている方は「あーこんな時代もあったね」とφ、知らない方は「ふーん」と思っていてください。

(小説を・山本哲也『XIII サーティーン』)

これらの例においては、φの位置に、主節の述語(二重下線部)と重複する述語が省略

<sup>6</sup> 「縮約」という用語は通常は音声学的な現象を指すようであるが(『日本語文法事典』『国語学辞典』『言語学大辞典』など)、英語学などで当該現象が「等位構造縮約」と呼ばれていることに従った。

されている。述語は1つだけ(二重下線部)生起しているのに対し、引用句は2つ現れているものと言えるが、1つ目の引用句の係り先はφの位置の省略された述語であり、2つの引用句がともに1つの述語に係るわけではない。また、このように引用構文を並列する文において等位構造縮約が起こる場合、異なる2つの事態を描写する様々な他の成分(各例の波線部)が2つの引用句の間に割り込んで生起するため、引用句の接続する形にはならない(この点については2.5でも考察する)。

## 2.4 (D) 副詞的成分の接続

次に、1つの事態の描写において、副詞的成分を接続させる表現について考えたい。

- (36) 骨のついたままの大きなバラ肉の塊、いわゆるスペアリブだ。長時間煮込むほど、①やわらかく②おいしくなる。

(BCCWJ・地球丸編集部『ダッチオープン料理入門』)

- (37) 天降川のせせらぎを聞きながら①ゆっくり、②のんびり過ごしてみませんか。

(BCCWJ・『広報きりしま』2008年05号)

- (38) 店の中から時折漏れ聞こえる声は、求めて止まなかったココット嬢のもの。俺は、①その明りに吸い込まれるように、②愛しい彼女の声に引き込まれるように、毎日通い続けたその扉に手を掛けた――。

(小説を・有明暁『亭主様と恋の種』)

(36)～(38)では副詞的成分が2つ接続している。(36)の形容詞連用形は述語に対する必須成分として機能し、(37)の副詞および(38)の副詞節は述語に対する任意成分として機能している。このように、1つの事態の描写において副詞的成分を必須か任意かを問わず接続させることができる。

ここで先行研究を参照すると、引用句「～と」も、副詞的成分として認められている。青木(1994)は、「～と言う」「～と思う」などにおいて「～と」を指示副詞「こう」「そう」と置き換えることができる点を指摘し、「～と」はどのように言う(思う)かを詳しく述べるもので、連用修飾成分とすべきことを述べている。また藤田(2000)は、次のような例を挙げて「～と」が連体修飾されない点を指摘し、「～と」が「～を」「～に」等の格成分と異なり、副詞的成分であることを示している。

- (39) 卓郎は、「おはよう」と言った。(藤田2000:619)

- (40) \*卓郎は、いつもの「おはよう」と言った。(同)

本稿ではこれらの指摘に従い、「～と」を副詞的成分であると認める。とすると、「～と」もまた、(36)～(38)のような副詞的成分と同様に、2つ連なって1つの発言ないし思惟の内容を詳しく表す場合があることが想定される。次の例は、そうした表現として理解できよう。

- (41) せめて、スライを 売れてる？F100fd にしたら、実質売れてないないようでも、通りすがりの人が<sup>①</sup>「結構売れてるの？」と、<sup>②</sup>「買おうかな？」と、思うかも。  
(価格.com・7748629)
- (42) でも、その彼に<sup>①</sup>「電話がきたら『誰？』って聞いて欲しいし、どこにいるのか？とかも聞いて欲しい」と、<sup>②</sup>「束縛されると愛されてると感じられる、されないと不安だ」と言われたので、私から聞くように意識して「誰？」とか聞くようにしました。  
(OKwave・q378579)
- (43) だから我々が、<sup>①</sup>金融三法についてもやはり急がなければならぬよと、<sup>②</sup>むしろ住専より急ぐべきだよと言ったのは、そこに意味があるんです。  
(衆議院・1996年6月6日)
- (44) 首相は<sup>①</sup>「法の許す範囲でベストを尽くせ」と<sup>②</sup>「私が命令しているのだから」と気楽なことをいうが、それだけでシビリアンコントロールも、日本人の安全も、確保されるとはとうてい思えません。(毎日新聞・1993年5月23日)
- (45) 同志社の首脳陣の皆さん、医学系学部、スポーツ系学部を作るなどというあいまいなことを言わず、困難なことにも命をかけて立ち向かわれた新島先生の熱き魂を受け継ぎ、<sup>①</sup>「同志社は医学部を作る」と<sup>②</sup>「しかもできるだけ早く医学部を作る」と新島先生にならって医学部設立の趣旨を全国に発表してください。  
(したらば掲示板・2006/10/19)

2つの「～と」の引用語句は、一続きの発言・思惟の内容と解される。すなわち、1つの発言ないし思惟の内容を、分割的に2つの引用句で提示しているのである。また、(41)～(43)では引用句が述語に対する必須成分となっているが、(44)(45)の引用句は任意成分である<sup>7</sup>。このように、述語に対して必須であるか任意であるかを問わず、1つの事態を描写する表現で用いられる点は、(36)～(38)のように副詞的成分が接続する現象と同様に捉えられる(これに対し、必須の格成分が重複する「\*花子を顔を殴る」のような表現が不適格になることは1節において確認した)。

以上の例は、引用句の後に発言・思惟を表す述語句が現れているので、2. 2で見た藤田(2000)の分類に従えば、第Ⅰ類の引用構文において引用語句が2つの「～と」に分割されたものといえる。一方、第Ⅱ類は「～と」の表す発言ないし思惟と、後続する述部が別々の事態となるものであるが、このタイプにおいても次のように「～と」が接続することができる。

- (46) 先生に思いっきりタメ口ですが、これはいつもあとで<sup>①</sup>「敬語！」と<sup>②</sup>「先生、つけえや」と丸めたプリントではたかれるパターンです。

<sup>7</sup> (44)の2つの引用句は、後続文脈の「それだけで」という指示表現が受けるため、文脈的には生起している必要があるが、「気楽なことをいう」という述語句にとっては任意成分である。

(小説を・鶴合コウ『魔法王国へようこそ!~Welcome to the Mafo-land~』)

- (47) 勉学に励み、ダンスを習得し、イイコになろうと努力をしても、両親は少女を顧みない。でも、誰もが認める立派な淑女になったとしたら。その時は①「頑張ったね」と②「偉いね」と頭を撫でてもらえるだろうか。

(小説を・勅使河原『ブラッドリー侯爵家の事情』)

(46) (47) の述部「丸めたプリントではたかれる」「頭を撫でてもらえる」は、2つの引用句が表す発言とは別の行為を表している。このような第Ⅱ類の構造の場合においても、2つの引用句が一続きで1つの発言(または思惟)となる点は変わらない。

以上に見たタイプでは、1つ目の引用句と2つ目の引用句の内容が、繋がった一続きの発言・思惟となる点が特徴であり、次のように一続きの発言・思惟と言えない引用句を2つ並べると容認度が落ちる。

- (48) a. ??太郎は、①「明日の朝は8時に外で集合しろ」と、②「よしもう時間だが皆来たか」と呼びかけた。

- b. ??太郎は、①「明日の朝は8時に外で集合しろ」と、②「よしもう時間だが皆来たか」とあたりを見回した。

(48) において、2つの引用句における発言内容はそれぞれ異なる時刻に行われるべきものであり、一続きの発言とは見なしにくい。

なお、一続きの発言・思惟を2つの「~と」に分ける境目は、意味的・統語的な区切り目になる。

- (49) 太郎が、「頭が痛くて、熱も出てきたみたいだ。今日は学校に行けそうもないよ」と言った。

- (50) a. 太郎が、①「頭が痛くて、熱も出てきたみたいだ」と、②「今日は学校に行けそうもないよ」と言った。

- b. \*太郎が、①「頭が痛くて、熱も出てき」と、②「たみたいだ。今日は学校に行けそうもないよ」と言った。

(49) の引用句を2つの引用句に分割する場合、分割する境目は、(50a) のような意味的・統語的な区切り目となる位置になる。あるいは、音声的な空白期間(ポーズ)の部分を区切り目とするという見方が正しいかもしれない。

## 2. 5. 比較検討

これまで、1つの述語に対し2つの引用句が現れる文について分析し、(A) 言い直し・(B) 第Ⅱ類引用構文・(C) 等位構造縮約・(D) 副詞的成分の接続という、統語的に異なる4通りの構造が考えられることを示した。そして、これらのうち引用句が接続する形を取るの(A)・(B)・(D)であり、(C)は他の成分が2つの引用句の間に割り込ん

で生起するため引用句が接続する形にならないものと述べた。

本項では、このうち(D)を取り上げ、他の(A)・(B)・(C)の3つの構造と相違することを確認する。3節で示すように、古代語においては引用句が接続した例の多くが(D)の構造として分析されるものであり、あらかじめ現代語において詳しく分析を行っておきたい。

さて、次の例は1つの発言または思惟の内容を2つの引用句で表す表現であり、(D)に分類できるものである。これらが(A)・(B)・(C)とは異なる構造を持つことを確認していきたい。

(51) これは口数をたくさん言え方がいいようなものじゃないですよ。私が言うたのは、しばって、①いまの日本の医療の欠陥は何ですかと、②そこをはっきり言ってくださいと言ったら、あっちも言い、こっちも言い、知ったことはみんな言うんだ。  
(衆議院・1977年10月27日)

(52) そして、我々日本国民はこれを達成するというを憲法の前文に書いてございます。まさしく私は、①このアフガニスタンの問題に対応するためにも、この憲法の前文に書いてある理念をやるべきではないかなと、②それが私たち日本の強力なメッセージになるのではないかと私は思います。  
(参議院・2007月12月11日)

まず、(A)言い直しによって引用句が接続するものは、1つ目の引用句の内容と、2つ目の引用句の内容が、両方とも事実上の同じ1つの発言を再現しようとしたものと考えられるものであった。(51)(52)においては、2つの引用句の内容がはっきり異っているため、両者を、同じ発言を再現しようとしたバリエーションと見なすことはできない。

次に、(B)第Ⅱ類引用構文の構造で、述部にさらに引用構文が組み込まれることによって引用句が接続するものと見るのはどうか。このタイプは、1つ目の引用句「～と」で表される発言・思惟が、後続する述語句「～と 述部」の表す事態と、同一場面で共存的关系にある、というものであった。とすると(51)(52)は、この構造として理解することもやはり難しいだろう。藤田(2000:224)は、第Ⅱ類引用構文の文が適格になる条件の1つとして、引用句に引かれる発言・思惟と後続する述部の表す事柄が「同一場面(特に時間的にほぼ同時)的であること」、という点を挙げている。

(53) a. おはようとしてきた。(藤田2000:224)

b. \*おはようと、やがてしてきた。(同)

適格な文である(53a)は、「おはよう」という発言が行われている期間と、「入ってくる」という動作が行われる期間とが重なるという解釈が可能である。それに対し、不適格な文である(53b)は、「やがて」という修飾語が「入ってきた」に係っており、「おはよう」という発言と「入ってきた」という事態の間に時間的間隔があるように読める。第Ⅱ類では、発言・思惟という行為が続いている期間と、述部の行為が続いている期間に共通

部分があること、少なくとも両期間が重なる時間帯が存在するという読みが可能なことが、文の適格性を保証すると考えられる。次の例からその点が明瞭に分かるだろう。

(54) \*「部屋に入りますよ」と、部屋の中で荷物を広げた。

(55) \*「もうおやつ食べ終わった？」と、太郎におやつを与えた。

(54)は、「部屋に入りますよ」という発言が、「部屋の中で荷物を広げる」という行為の開始時点よりも先に行われるべきものであり、両事態は時間的に共存しえない（部屋に入った後で荷物を広げながら「部屋に入りますよ」と発言する、という場面を描いているならば(54)も許容されるが、それは常識的にありえないだろう）。また、(55)の「もうおやつ食べ終わった？」という発言は、「太郎におやつを与える」という行為よりも後に行われるべきものであり、やはり両事態は共存しえない（太郎におやつを与えると同時に「もうおやつ食べ終わった？」と尋ねている場面ならば(55)も許容されるが、これも常識的にありえないだろう）。ここで(51)(52)を見ると、2つの引用句の語句は、線条的に一続きの文章を形作っているものと考えられる。それぞれ2つ目の引用句の冒頭に代名詞「そこ」「それ」があるが、これは1つ目の引用句に含まれる語を受けるものであり、一続きの文章として見る以外にない。すなわち、1つ目の引用句の発言（または思惟）が終わった後に続けて2つ目の引用句の発言（または思惟）が行われるという、時間的な前後関係が確実に存在するのであり、両者が重なることはありえない。とすれば、(51)(52)を、第Ⅱ類引用構文の述部にさらに引用構文が現れるという(B)の構造と見ることも適当でないと考えよう。

では、(C)等位構造縮約が起きているものと考えすることは可能だろうか。2. 3で見たとように、等位構造縮約は、異なる2つの事態を並列した複文において、主節の述語句と重複した従属節の述語句が省略されるという現象である。1つの発語・思惟を述べる(51)(52)とは異質の現象と考えられるだろう。以下、等位構造縮約に関して少し踏み行なって検討を加えたい。

(56) a. 私は水を飲み、妻はビールを飲んだ。

b. 私は水をφ、妻はビールを飲んだ。

等位構造縮約が起こる場合、(56)のような並列表現の複文において従属節と主節とが対句的な形をとり、通常、2つの節に「私／妻」・「水／ビール」のような、意味的に対になる成分が2組以上現れる。

しかし、次のようにヲ格・ニ格などの格成分の対が一組だけ現れ、連接する形になる場合がある。

(57) a. だが、だからと言って、芸術が自己を滅することにはならぬ。むしろ、芸術は「日常」をφ、「政治」を、包み込んで永いのである。

(BCCWJ・内村剛介『生き急ぐ』)

b. 川辺独特の暴力的に強烈な風が、飛ぶ鳥をφ、行く川を、押し戻すように

吹き抜ける。

(BCCWJ・清川悠山『意味』)

(58) a. もとより、江戸に、伊賀に、天草衆はなお残っている。

(BCCWJ・山田風太郎『外道忍法帖』)

b. これ以上詰まらぬ憐憫を受けては、血に、位牌に、申し訳が立たない。

(BCCWJ・いしいしんじ『白の鳥と黒の鳥』)

このような表現は、修辭的なニュアンスを伴う点でやや特殊なものであるが<sup>8</sup>、主節の述語句(二重下線部)と重複する従属節の述語句がφの位置に省略されたもの、すなわち等位構造縮約と考えることが可能かもしれない。次のような例では、等位構造縮約に關して確認したように、2つの異なる事態を述べるという基本構造が明瞭に見て取れる。

(59) 私はその日、昼の富士山を、夕暮れ時の富士山を、写真に収めた。

(60) 私は、太郎のあの日の行動に、次郎の今日の言葉に、心を打たれた。

(59)で、「昼の富士山を写真に収める」という事態と「夕暮れ時の富士山を写真に収める」という事態は別の時刻に発生した事柄であり、また(60)でも「太郎のあの日の行動に心を打たれる」という事態と「次郎の今日の言葉に心を打たれる」という事態はやはり別の時刻に発生した事柄である。(57)(58)でも、述語の表す事態が2つの格成分の表す事物に対して別々に起こっているという解釈ができよう。

一方、引用句が接続する形では、異なる時間に発せられた2つの発言(または思惟)を引用語句とすることはできない。

(61) ??太郎は、「明日の朝は8時に外で集合しろ」と、「よしもう時間だが皆来たか」と呼びかけた。(48a)再掲

この例の2つの引用句はそれぞれ異なる時刻に発せられた発言を指しており、一続きの発言と見なすことが難しい。(61)が許容されないことは、引用句が接続する形が、(57)～(60)のように格成分を接続させて2つの事態を述べる表現と同様の構造を取ることができない、ということを示している。ゆえに、引用句が接続する(51)(52)は、異なる2つの事態を並べる(57)～(60)のような文とも異なる構造を持つと考えるべきだろう。

なお(61)は、次のように、2つの異なる事態を描写する成分(波線部)が「～と」以外にも対になって現れれば適格になる。

(62) 太郎は、夕食の時には「明日の朝は8時に外で集合しろ」と、翌朝の出発前には「よしもう時間だが皆来たか」と呼びかけた。

引用句「～と」に見られるこのような性質は、副詞・形容詞連用形・副詞句といった副詞的成分においても認められる。

(63) 彼は、若い頃は常に、老いてからは時折、寂しそうな顔をしていた。

<sup>8</sup> 文学作品などに特有の技法と思われ、日常会話では好まれない。

(i) ?僕は家に、太郎を、次郎を呼んだ。

(ii) ?君は太郎に、次郎に、プリントを渡したか?

(64) 私は、先月は長く、今日は短く、髪を切りそろえた。

(65) 太郎は、昨日は非の打ち所の無い優等生のように、今日は何の取り柄も無い劣等生のように、振る舞っていた。

(63)～(65)では、発生時刻の異なる2つの事態を並列した文において等位構造縮約が起きている。ここから引用句以外で対になって現れた成分(波線部)を消去し、副詞的成分(一重下線部)が接続する形にすると次のように不適格になる。これは、引用句の場合と同様の現象と言えらる。

(63)′ ??彼は、常に、時折、寂しそうな顔をしていた。

(64)′ ??私は、長く、短く、髪を切りそろえた。

(65)′ ??太郎は、非の打ち所の無い優等生のように、何の取り柄も無い劣等生のように、振る舞っていた。

以上に見てきたように、格成分は接続して2つの異なる事態を並列する表現を作ることができるが、副詞的成分はそれができない。ただし、副詞的成分は2・4で見たように接続して1つの事態を詳しく説明する表現を作ることができる。引用句「～と」について考えると、異なる2つの発言(または思惟)を表す2つの引用句を接続させることは不可能であるのに対し、1つの発言または思惟を分割的に2つの引用句で提示することは可能である。このことは、引用句が副詞的成分として機能すること、そして1つの事態の描写において副詞的成分を接続させる表現の一環として、1つの発言(または思惟)の内容を2つの接続する引用句で提示できる、ということを示している。

### 3 古代語における検討

以上の現代語における分析を踏まえ、本節では、古代語において引用句が接続する次のような例について考察したい。

(66) 少将、「かの北の方に、いかでねたき目見せむと思へばなり」とのたまへば、女君、「これはや忘れたまひね。かの君や憎かりし」とのたまへば、少将、  
①「いと心弱くおはしけり。人の憎きふし思し置くまじかりけり [=他人の憎らしいところを心にお留めにならない方なのですね]」と、②「いと心安く」とのたまひて、臥したまひぬ。(落窪・二・146)

(67) 一宮のいみじう泣き給ふが、あはれにおぼされて、[小一条院は]①「いくばくもあらざりける御有様が [=長くはないお方だったのに]、[私は]などてつらしと覚えられ奉りけん」と、②「年頃の本意なく、あはれなるわざかな」とおぼされて、下の宮に渡らせ給て、…(栄花・十六・下-26)

現代語に関しては、1つの述語に対し2つの引用句が共起する表現が、(A)言い直し・(B)第Ⅱ類引用構文・(C)等位構造縮約・(D)副詞的成分の接続という4種の構



造においてありうることを述べた。そして、このうち(A)・(B)・(D)は引用句が接続する表現になるが、(C)は2つの引用句の間に他の成分が生起するため引用句が接続する形にならないものであった。結論から言えば、古代語において引用句の接続する例は、(B)または(D)の構造のものであり、現代語で見た構造と異なるものは見出しがたい。本節では、引用句の接続を古代語における特殊な表現として指摘する先行研究について検討を行った後、実例の状況を示すことにしたい。

### 3. 1 先行研究

#### 3. 1. 1 中村・碁石(2000)

中村・碁石(2000)は、次のように格成分が接続する「～に～に」「～を～を」の例と、引用句が接続する「～と～と」の例を一括して挙げ、「この表現形式は、同一の場所や事物に対して異なる視点から2項に分けて説明するという方法を用いているということが出来ます」と説く。

- (68) 「①この鏡を、②あなたに写れる影を見よ。これ見れば、あはれに悲しきぞ。」  
(更級日記／中村・碁石2000:57、以下5例に付した番号は筆者による)
- (69) ①またの年の正月に、②梅の花盛りに、去年を恋ひていきて、立ちて見、居て見、見れど、去年に似るべくもあらず。  
(伊勢物語／同:56)
- (70) 「いかなる者ぞ。」と重ねて問へば、『今は逃ぐとも、逃ぐまじかめり』と思ひて、①「引剥ぎにさぶらふ。」と、②「名をば袴垂となむ申しさぶらふ。」  
と答ふれば、…  
(今昔物語集／同)

さらに、次のように主題の「～は」を重ねる例を挙げ、(68)～(70)と同様の発想によるものであるとも述べている。

- (71) その男、この亀を見付くるままに、「①彼は、②己が元の妻の奴の逃げたりしは、ここにこそありけれ。」と言ひて、…  
(今昔物語集／中村・碁石2000:58)
- (72) ①小娘は、②恐らくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懐に藏していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切まで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。  
(芥川龍之介「蜜柑」／同)

すなわち、中村・碁石(2000)では(68)～(72)の5例全てが同質の現象として理解されていることになる。しかし、これらの例には異なる性格の現象が混在しているように思われる。すなわち、格成分の接続する(68)(69)、引用句の接続する(70)、主題形式が接続する(71)(72)の3者は、別の性質の現象と見るべきではないだろうか。

まず格成分が接続する(68)(69)について、(68)の2つのヲ格はともに述語動詞「見る」

の対象を表す点で意味役割が一致し、(69)の2つの二格は後続部分の表す事態の発生した期間を表す点で意味役割が一致している。このような、意味役割の一致する同一格成分が文中に共起する現象を扱う研究に、佐伯(中村)(2002, 2003, 2009)がある。佐伯(2009)は、平安時代から江戸時代にかけて対象格のヲ格成分が2つ共起する例を抽出し、そうした例について、1つ目のヲ格成分で〔略述〕された内容に対し2つ目のヲ格成分で何らかの〔詳述〕がなされる、という意味的關係が認められることを論じている<sup>9</sup>。また中村(2002)は、平安時代語において二格成分が2つ共起する例の存在を指摘し、そうした例について、1つ目の二格成分が表す場所の中に2つ目の二格成分が表す場所が位置するという意味的關係(局限の用法)、または1つ目の二格成分の表す事柄を2つ目の二格成分で具体的に詳説するという意味的關係(詳説の用法)が認められることを示している<sup>10</sup>。

(77) 亦此ノ木ニ差テ取上タル物ヲ、崎ヲ少シ嘗ツレバ、苦クシテ甘シ、馥シキ事無限シ。 (〔詳述〕—〔略述〕關係の二重ヲ格／今昔・三十／中村2009:60)

(78) a. 其ノ後、東山ニ如意ト云フ所ニ住ケルニ、六条院ニ「只今參レ」ト召ケレバ、知タル人ノ馬ヲ借テ其レニ乗テ早朝ヨリ參ル。

(局限の用法の二重二格／今昔・十九／中村2002:90)

b. 今昔、文徳天皇ノ御代ニ、智証大師ト申ス聖存マシケリ、俗姓ハ和氣氏、讃岐ノ国、那珂ノ郡金倉ノ郷ノ人也。…〈中略〉…亦、十四歳ニテ家ヲ出テ京ニ入テ、叔父ニ、仁徳ト云フ僧ニ付テ、始メテ比叡山ニ登ル。

(詳説の用法の二重二格／今昔・十一／同:93-94)

(77)では対象格のヲ格成分が2つ共起しているが、1つ目のヲ格成分では対象を「この木に差して持ち上げたもの」と略述して提示し、2つ目のヲ格成分では対象を「その先端部分」と詳述して提示するという關係が認められる。(78a)は局限の用法とされる二

<sup>9</sup> なお、金榮敏(2006)は現代韓国語において、金田(1993)は八十島三根方言において、古代日本語の場合と類似する意味的關係(「全体一部分」の關係)で2つの対象格成分が共起する点を指摘している。佐伯(中村)(2002, 2003, 2009)が指摘する格成分の重複現象は、古代日本語に特有の現象ではないものと思われる。

<sup>10</sup> また、筆者の見るところでは、ヨリ格も、二格同様に局限の用法を持つ。

(i) a. むかしより、われ生まれける日より、[父が]亡くなりたまふまで、思しけるやう、ありけることどもを記し置きたまへる日記は、肝絶えて悲しきこと数知らず。

(宇津保・樓上下・3-528)

b. 出でさせたまひてまたの日、内裏より、中宮の御方より聞えさせたまへる、風心あわたたしかりければなるべし。

(栄花・卷十一・2-41)

(ii) a. ?昔から、私が生まれた日から、父が亡くなるまで、父が思ったことや書き記しておいた日記には悲しくなるようなことがたくさん書いてあった。

b. ?宮中から、中宮の部屋からお手紙が届いた。

(i a)では、「むかし」で表される一定期間内に「われ生まれける日」があり、(i b)では、「内裏」という建物の中に「中宮の御方」という部屋がある。現代語ではこうした表現を用いると(ii)のようにやや不自然になる。

思し召して顧みさせ給へ。兄の童に思しませ。官を得さすとも、兄にはまさらむ」と、②「すべて、この子を太郎にはせよ」と、常にのたまひて、御名も弟太郎となむつけ給へりける。

(落窪物語／加藤昌嘉2006:14、番号と下線は筆者)

- (82) 殿守、①「げにさなむものしたまふ。何かは許し聞こえたまはざらむ。そがうちにも殿守ら侍れば、御願ひも必ず叶へたてまつりはべらむ」と、②「さはありとも、また御消息聞こえたまへ」といふ。(宇津保物語／同)

また、このように引用句が接続する例が中古語の諸資料でよく見出されるのに対し、『源氏物語』では稀であるという資料上の分布にも言及している。

以上の指摘に関連して、次の疑問点が浮かび上がる。まず、(81) (82)のような表現が現代語の感覚では不自然とされる点であるが、2節で見たように現代語でも引用句が接続する表現は用いられるのであり、現代語と同様に解釈できる可能性はあるように思われる。また、各資料の例数も、具体的なデータが示されていない点で再検証の余地があるように思われる。実際、後述するように、『源氏物語』においても引用句が接続する例はある程度見られるため、資料の性格との関係は改めて考えるべきところと思われる。

### 3. 2 実例の分布

古代語の各資料<sup>12</sup>から、一定の基準<sup>13</sup>に従って引用句が接続する例を抽出しその分布

<sup>12</sup> 中村・碁石(2000)・加藤(2006)や、古代語における格成分の重複現象を扱う中村(佐伯)(2002, 2003, 2009)を参考にし、中古語の各資料と『今昔物語集』を調査対象とした。本稿では、便宜的にこれらをまとめて古代語の資料として扱う。

<sup>13</sup> 引用句が接続する用例を抽出するに当たっては、1つ目の引用句が、2つ目の引用句の後の述語と関係を有することを認定することが肝要である。例えば次のような例でも、一文中に2つの「～と」が含まれているが、それぞれ別の述部(二重下線部)に係っている。用例を収集する際、このような例を排除することが必要になる。

(i) 今はかかる方ぎまの御調度どもをこそは、と思せば、年の内にと急がせたまふ。

(源氏・賢木・2-134)

(ii) …少将の君もゆかしうて[=少将もあこぎや姫君の姿を見たくて]、『いと暗し、あげよ』とのたまふめり』とのたまへば、物踏み立ててあげつ。(落窪・一・54)

そこで、用例の検索に当たっては、依拠テキストにおいて、2つ目の引用句が鉤括弧で囲まれている例を収集することとした。鉤括弧で囲まれている部分の内部に、その鉤括弧より前の引用句に係る述語句が存在しないことが機械的に判別でき、(i) (ii)のような例を容易に排除することができるのである。具体的には、1つ目の引用句のトの直後に鉤括弧開きが付され2つ目の引用句の開始点が表示されているものを収集した。ただし依拠テキストによっては、全ての会話文・心内文が鉤括弧でマークされているわけではないため、全例調査を行ったことにはならない。そこで、量的に大きい『源氏物語』については、まず本稿で調査対象とした新編日本古典文学全集(以下「全集」と呼ぶ)の本文から例を得た後、日本古典文学大系(以下「大系」と呼ぶ)の本文も調査を行い、大系から得られた例を全集の本文と照らし合わせることで、全集の本文において2つ目の引用句が鉤括弧で囲まれている例を追加採取した。また、『今昔物語集』には「いはく～と～と(いふ)」のように、発言または思惟を表す動詞のク語法に引用句が接続して後続する場合があるが(この場合引用句の後に述語が現れないものもある)、こうした例も計上した。

重二格の例であり、1つ目の二格成分「東山」の表す地域の中に2つ目の二格成分「如意ト云フ所」が位置していることが認められる。(78b)は詳説の用法とされる二重二格であり、1つ目の二格成分「叔父」が2つ目の二格成分「仁徳ト云フ僧」によって具体的に詳説されるという関係が認められる。こうした表現は現代語では容認度が落ちる。

(79) ?この木に差して持ち上げたものを、先端を少し舐めたところ、…

(80) a. ?東山に如意という所に住んでいたが、…

b. ?十四歳で出家し、京に入って叔父に仁徳という僧について、…

(68) (69)はこうした現象の一環として捉えられるものだろう。

次に、本稿で考察対象である引用句の接続の例(70)は、今見たような格成分の接続における[略述]と[詳述]などの関係と同様に捉えることは難しい。1つの発言を分割して2つの引用句で提示したものと解されるところから、現代語の分析において2. 4で示した(D)の構造のものと考えられる。

そして(71) (72)は、現代語の分析において2. 1で示した言い直しの表現として了解される。(71)の「彼」は「その男」の元の妻を指し、後続の主要部内在型関係節「己が元の妻の奴の逃げたりし」は「逃げてしまった「己が元の妻の奴」」を指すのであって、両者の指す対象は同一人物である。(72)で主題化された2つの成分もやはりともに「小娘」を示している。(71) (72)の2つの主題は言い直しの関係にあると言えよう。

このように中村・基石(2000)の示す例は異なる構造のものを含んでいると考えられ、引用句の接続する現象の位置づけとしては再考の余地があるものと言える<sup>11</sup>。

### 3. 1. 2 加藤昌嘉(2006)

加藤昌嘉(2006)は、次のように中古語において引用句が接続する例を挙げ、「時に、現代人に違和感を覚えさせることがある」と述べる。

(81) 内裏に参りて奏し給ふ、①「これなむ、翁の、限りなく愛しとおぼえ侍る。」

<sup>11</sup> なお中村・基石(2000)は、引用句の接続する例を「長い会話などの分割」を表すものとしているが、次のように、長いとは思われない発言でも2つの分割されることはある。

(i) ①「何事ならむ」と、②「心苦し」と見れば、十ばかりなる男に、朽葉の狩衣、二藍の指貫、しどけなく着たる、同じやうなる童に、硯の箱よりは見劣りなる紫檀の箱の、いとをかしげなるに、えならぬ貝ども入れて、持て寄る、… (堤中・貝合・449)

また、古代語においては、次のように長大な引用語句でも一つの引用句に収まる例が容易に見出せるのであり、長い会話を分割するための表現手段が求められていたとも考えにくい。

(ii) おとなしき御乳母ども召し出でて、御裳着のほどのことなどのたまはするついでに、「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生ほしたてけむやうに、この宮を預かりてはぐくまむ人もがな。ただ人の中にはありがたし、内裏には中宮さぶらひたまふ、次々の女御たちとて、いとやむごとなきかぎりものせらるるに、はかばかしき後見なくて、さやうのまじらひいとなかなかならむ。この権中納言の朝臣の独りありつるほどに、うちかすめてこそ心みるべかりけれ。若けれど、いと警策に、生ひ先頼もしげなる人にこそあめるを」とのたまはす。 (源氏・若菜上・4-27)

状況を表1に示した。現代語では、(A)言い直し・(B)第Ⅱ類引用構文・(D)副詞的  
成分の接続という3種の構造において引用句の接続する形がありえたが、古代語の用  
例もこれに従って分類することができた。事例は3. 3で順に示すが、(D)の例が圧  
倒的に多く、(B)も若干例出るが(A)の例は見出せない。

(A)の例が見出せない点は、資料の文体的性格と関  
わるものと思われる。加藤陽子(2010)では、現代語に  
おいて(A)の構造で引用句が接続する例が、話し言葉  
特有の表現として挙げられている。この指摘を踏まえ  
ると、古代語において(A)の構造の例が出ない点につ  
いては、古代語の各資料が書き言葉の性質を持つとい  
う、文体的な問題と関わる可能性を考慮すべきだろう。  
文体的性格という観点で各資料ごとの例数を比べると、  
(D)の構造の引用句の接続は物語で多く見出せるが、  
日記では見出しにくい。物語と日記というジャンル上  
の区別が、(D)の構造で引用句が接続する表現の成立  
に関わる可能性があるが、本稿ではこうした文体的問  
題に関しては踏み入らないことにしたい。以下、事例  
を示しつつ簡単に検討を加える。

	A	B	D
竹取物語	0	0	0
伊勢物語	0	0	0
土佐日記	0	0	0
落窪物語	0	0	17
蜻蛉日記	0	0	0
平中物語	0	0	1
大和物語	0	0	0
枕草子	0	0	0
源氏物語	0	3	17
紫式部日記	0	0	0
和泉式部日記	0	0	1
夜の寝覚	0	0	13
浜松中納言物語	0	0	9
更級日記	0	0	0
狭衣物語	0	1	9
栄花物語	0	0	6
堤中納言物語	0	0	4
今昔物語集	0	0	44
合計	0	4	121

### 3. 3 (B)第Ⅱ類引用構文の述部に引用構文が現れる例

2. 2では、第Ⅱ類引用構文の述部にさらに引用構文が組み込まれるという重層的  
な構造において引用句が接続することを指摘した。第Ⅱ類は、藤田(2001:100)が「万  
葉集」の段階に遡っても、第Ⅱ類(α類)の構造の例は、容易に見いだせる」と述べ、  
また竹内(2005:173)が「上代語の引用構文においても第Ⅰ類と第Ⅱ類との区別が認め  
られる」としているように、古代から既に確認できる<sup>14</sup>。

(83) a. 潮さるの浪を怖み淡路島磯隠り居ていつしかもこの夜の明けむと(此夜  
乃将明跡) さもらふに (侍従尔) 眠の寝ねかてねば…

<sup>14</sup> 中古語の引用構文の分類を行ったものに足立(1970)があり、「～といふ」「～とのたまふ」など発言  
を意味する動詞を述語とする引用構文を、「引用された会話が、それら動詞の表す具体的な内容を示  
す」と説いて「包摂」と称し、「～とうなづきをり」など発言を意味しない動詞を述語とする引用構文  
を、「引用された会話表現と、それらの動詞の表す行動とが共通の条件に支えられて成立する」と説い  
て「並列」と称している。藤田(2000)の第Ⅰ類・第Ⅱ類という分類に近いものに見えるが、足立(197  
0)の分類では形容詞を述語とする引用構文が「並列」に入っている点で藤田(2000)の見方と若干相違  
するようと思われる。形容詞など動詞以外の品詞を述語とする引用構文の文法的性質については今後の  
課題としたい。

- b. 四の君まだ帳のうちに寝たまへり。北の方、「起きたまへ」と起こしたまふほどに、[使者が] 帥の文持て来たり。 (落窪・四・313)
- c. 其ノ所ニ二膀ナル木有リ。其ノ膀ニ入道登リ居テ、金ヲ叩テ、「阿弥陀佛ヨヤ、ヨイヨイ」ト叩ヒ居タリ。 (今昔・十九・4-94)

(83) は、いずれも述部において引用句の表す発言・思惟とは異なる事態が述べられている。第Ⅱ類の述部にさらに引用構文が組み込まれた構造の例としては次のようなものがある。

- (84) [院は自分が] もののみ悲しき御心のままならば、[大臣が源氏の手紙を] 待ちとりたまひては、[源氏を] 心弱くもと、目とどめたまひつべき [= 見咎めるに違いない] 大臣の御心ざまなれば、めやすきほどにと [= 文面は見苦しくない程度にと]、「たびたびのなほざりならぬ御とぶらひの重なりぬること」とよろこび聞こえたまふ。 (源氏・御法・4-514)

- (85) 今、行く末も定めなき世にて、もし別るるやうもあらば」など、泣きみ笑ひみ、戯れ事もまめ事も、同じ心に慰めかはして過ぎしたまふ。かの行ひたまふ三昧、今日をはてぬらんと、いつしかと待ちきこえたまふ夕暮に、人参りて、「今朝よりなやましくてなむ、え参らぬ。風邪かとて、とかくつくるふともものするほどになむ。さるは、例よりも対面心もとなきを」と聞こえたまへり。 (源氏・権本・5-187)

(84) の述部は第Ⅰ類の構造を持ち、(85) の述部は第Ⅱ類の構造を持っている。このタイプの例は本稿の調査では4例のみに留まった。2. 2で述べたように、この表現は1人の主体が2つの発言または思惟を同時に行うという場面を描くものであり、例数が少ない点はそうした独特の表現性によるものと思われる。

### 3. 4 (D) 副詞的成分が接続する現象の一環として捉えられる例

2. 4では、1つの事態の描写において副詞的成分が接続する表現の一環として、1つの発言または思惟を接続する引用句で分割的に提示する表現があることを述べた。古代語において引用句が接続する例の多くは、この構造を持つものとして捉えられる。調査では121例が見出された。

- (86) [北の方が]<sup>①</sup> 「おいらかにはじめより、『かうかうしたり』と「あなたと少輔との関係を」言はましかば、忍びてもあらましを。露頭をさへして、かくののしりて、我も人もゆゆしき恥を見ること。誰が媒してしはじめしぞ」と<sup>②</sup> 「言へ」と責むれば、四の君、あさましういみじうなりて、ただ泣きに泣く。 (落窪・二・163)

(87) 此レヲ引上テ見レバ、被縛タル僧也。顔ノ色不替ズシテ衰ヘタル気色无シ。船人、大ニ奇テ、①「何人ゾ」ト、②「此ハ被縛タルハ」ト問ヘバ、「我ハ、然々ノ者也、盗人ニ値テ被縛レテ被落入タル也」ト答フ。

(今昔・十四・3-329)

(88) 敵ノ国ノ王、此ノ事ヲ聞テ云ク、「我レ、彼ノ国ニ行向ハムヨリハ、只、其ノ国ノ太子ヲ召ニ遣ラバ、更ニ遁ルル事ヲ不得ジ」ト云テ、使ヲ遣テ云ク、①「其ノ国ニ太子ト云フ者有リト聞ク。速ニ来テ可随シ」ト、②「然ラバ、国ヲモ預ケテ令知メム。若シ、不来ズハ、其ノ類ヲ可斬シ」ト。国ニ残レル人、此ノ事ヲ聞テ、恐テ怖レテ、…

(今昔・九・2-318)

(86)の2つ目の引用句における「言へ」は、省略部分を補って解すると「誰があなたと少輔の間を取り持ったかを言え」という意味であり、省略された対象格成分は1つ目の引用句末の「誰が媒してしはじめしぞ」という質問部分に求められる。(87)は、1つ目の引用句の内容と2つ目の引用句の内容が倒置の関係にあり、統語的な繋がりを有している。(88)では、2つ目の引用句冒頭の代用表現「然ラバ」が1つ目の引用句の内容を受けている。このように、2つの引用句の内容を一続きの発言または思惟と見る以外に無い例が出る点は、現代語と同様である。

以下で見ていく例も、一続きの発言ないし思惟の内容を2つの「～と」に分割した表現と解される。

(89) …[内大臣は]御消息もなくて宮へ参り給ふついでにも、南の御廉のうちに、「姫君はいかに」とばかり、あさはかにて、やがてたち入らで、若君をも、①「我を思はば、母なしばし見奉り給ひそ」と、②「[お前の母は]われをいみじくにくみ給へば、心憂し」と言ひしらせて、わたし奉り給はず。

(寢覚・三・189)

(90) 「これにつけて、まづほのめかしたまへ」と聞こえたまへば、文書きてとらせたまふ。①「時々は、山におはして遊びたまへよ」と、②「すずろなるやうには思すまじきゆゑもありけり」とうち語らひたまふ。この子は、心得ねど、文とりて御供に出づ。

(源氏・夢浮橋・6-382)

(91) [北の方は]あこぎをたづね求むれど、いづくにかあらむ。落窪をあけて見たまへば、ありと見し几帳、屏風ひとつもなし。北の方、①「あこぎといふ盗人の、かく人もなき折を見つけてしたるなり。やがて[あこぎを]追ひ棄てむと思ひしものを、[あなたが]『[あこぎは]使ひよし』とのたまひて、かくつひにまけぬること」と、②「[あこぎは]心肝もなく、相思ひたてまつらざりしものを[=あなたをお慕い申し挙げることもなかったのに]、しひて使ひたまひて」と、三の君をいみじく申したまふ。

(落窪・二・139)

(92) 内より、藏人の少将を御使にて、①「若君まいらせ給へ」と、②「ただしばし

の程にてまかで給にしままに、などかと、おほせごとあり。

(寝覚・四・316)

- (93) [蛇が溺れて助けを求めているが]船ノ人、「蛇乗セム」トモ不云ヌニ、龜ノ云ク、「彼ノ蛇死ナムトス、乗セ給ヘ」ト云ヘバ、此ノ男、「更ニ不可令乗ズ。小キ蛇ソラ恐シ。増シテカク許大ナル蛇ヲバ何デカ乗セム、被吞ナムトス。糸ト益无キ事也」ト云ヘバ、龜、<sup>①</sup>「更ニ不可吞ズ。只、乗セ給ヘ」ト、<sup>②</sup>「カカル者ヲバ助クルガ吉キ也」ト云ヘバ、此ノ龜ノ後安ク云ヘバ、乗メツ。

(今昔・五・1-379)

(89)～(93)の述部は、「言ひしらす」「うち語らふ」「申す」「おほせごとあり」「云ふ」のように発言を示す表現が用いられている。

- (94) 何かは、心隔てたるさまにも見えたてまつらじ [=宮によそよそしい様子は お見せするまい]、山里にと思ひ立つにも、頼もし人に思ふ人も疎ましき心そひたまへりけり、と[女君は]見たまふに、世の申いとところせく思ひなられて、<sup>①</sup>なほいととき身なりけりと、<sup>②</sup>ただ、消えせぬほどは [=生きている間]あるにまかせておいらかならん[穏やかに過ごそう]と思ひはてて、いとらうたげに、うつくしきさまにもてなしてあたまへれば、いとどあはれに、うれしく思されて、日ごろの怠りなど限りなくのたまふ。

(源氏・宿木・5-433)

- (95) …[内大臣が]うちいでん事の、いみじうわれはづかしう、心ぐるしきに、せきとどめ、つつみ言ひ出給はぬを、[寝覚の上は]<sup>①</sup>「さればよ。ひと夜も、さばかり[生霊が]あらはれ出でてののしる気色を、『さこそありしか』と、あらぬことと思さば、のたまはざらましやは [=内大臣が、生霊の騒ぎを事実ではないと思ひなら「こんなことがあった」とお話し下さるだろう]。[しかし黙っていらっしゃるのは]]ふかくまことと思すなめり。いかでかは、さりとして [=真実とお思いだからといって]、なごりなく、ひき切りなる御心づかひのあらん [=私を性急に突き放すことがあるか]。なかなかさりげなくて思すらんこそ、いみじう、はづかしう、心憂けれ」と<sup>②</sup>「この人のほのめい給ふたびごとに、みだるる心いまやいまあくがれよらん」とこそ [=私の乱れた心がさまよい出て女一の宮に取り憑いているのだろうか]と、我ながらゆゆしけれど、さはれ、見えはつべき身かは」と思せば、いとなだらかに、おほどきたる気色に、…

(寝覚・四・303)

- (96) [源氏が、扇に書かれた歌の詠み手を知るために、留守番の男に西隣の家の住人について問うたところ、男は]「揚名介なる人の家になんはべりける。男は田舎にまかりて、妻なん若く事好みて、はらからなど宮仕人にて来通ふと申す。くはしきことは、下人のえ知りはべらぬにやあらむ」と聞こゆ。



①[源氏は]さらば、[あの歌は]その宮仕人ななり、したり顔にももの馴れて言へるかな [=得意満面に馴れ馴れしい詠みかけをしたものだなあ]と、②めざましかるべき際にやあらん [=きつと気に入くない感じの女だろう]と思せど、さして聞こえかかれる心の憎からず、過ぐしがたきぞ、例の、この方には重からぬ御心なめるかし。(源氏・夕顔・1-140)

(97) [狭衣は]①「一品の宮からの御返いかならん」と、②「これさへ侘しう見落しなば、猶、いかがはせん」と思せば、とみにも[手紙を]開け給はぬを、「いと心もとなし」と、宮、思したれば、ひろげ給へるに、物も書かれざりける。(狭衣・三・278)

(98) [大きな槻を切ろうとする者が突然死を遂げている場面で]其時二、或ル僧ノ思ハク、①「何ナレバ、此ノ木ヲ伐ニハ人ハ死ル」ト、②「構テ此事知ラバヤ」ト思テ、雨ノ隙无ク降ル夜、僧自ラ、蓑笠ヲ着テ道行ク人ノ木蔭ニ雨隠 [=雨宿り]シタル様ニ、木ノ本ニ竊ニ拔足ニ寄テ、木ノ空 [=穴]ノ傍に竊ニ居ヌ。(今昔・十一・3-100)

(94)～(98)では、述部に「思ひはつ」「おぼす」「思ふ」といった思惟を表す動詞が用いられている。以上は、述語の表す発言または思惟の内容を2つの引用句で分割的に提示するものである。2、2で見た藤田(2000)による引用構文の分類に従うと、第I類の構造において引用句が2つに分割されたものと言える。

(99) …立ち走り、又、君の臥し給へるかたわらにきて、床より、ひき下しつゝ、①「こゝらの寶を盡して、うへの思し急ぐ幸るを、心として焼き失ひ滅ばし給へるにこそあめれな。今いくばくの日數の心もとなさに、受領男を急ぎし給ふぞや。下臈なる身の、物の用多かるだに、名の惜しければ、若うより、物したゝかなる男は設け侍らぬものを。いづちにもいづちにも早く行き失せ給ひぬ」と、②「恥知り給はぬか」と、爪弾きをしかくるさまの、いとおどろおどろしう恐ろしげなるに、髪をふりかけて泣き居給へる火影の、心苦しげなれば、…(狭衣・三・254)

(100) 而ル間、生贄、舅ノ家ニ行テ、「門ヲ開ヨ」ト叫ケレ共、音モ不為ヲ、①「只開ヨ、ヨモ悪事不有。不開ハ中々悪キ事有ナム」ト、②「疾ク開ヨ」ト、門ヲ踏立レバ、舅出来テ、娘ヲ呼出シテ、…(今昔・二十六・4-437)

これら(99)(100)の述部「爪弾きをしかく」「門を踏立つ」は、2つの引用句の表す発言(または思惟)とは別の事態を表している。第II類の構造において引用句が2つに分割されたものと言えよう。このように、(D)の構造で引用句が連接する現象が、第I類・第II類の両方で起こるといふことも、現代語と同様である。

従来注目されてこなかった表現であるため、用例を多めに示しつつ見てきたが、2つの「～と」における引用語句が、発言または思惟の内容に限られ、「聞く」「書く」

といった別の言語行為の内容が引用される例が見出せない点は興味深い。次の例では「聞く」を述語としているが、伝聞内容が引用されるのではなく、やはり「聞く」主体の思惟内容が引用されている。

- (101) [世間の人が]「つゝにこの后を、京のうちにもえあらせてまつらずなりぬる事」とあはれがるを、[一方で]中納言、[以前出遭った女について]人知れぬおもひたえがたくなりまさるにつけても、この後の、見し人にもいとようおぼえしも見たてまつらまほしうて、[世間の人の噂話を]①「「もし後に逢えれば」我こころもいささかなぐさめやせんと、心をかけたてまつるものを」と、②「「いかにおぼして、はるかに籠り居給ひぬらん」と、あはれに聞きたてまつり給。」(浜松・一・184)

現代語においても、発言・思惟の内容が現れやすいようであるが、次のような表現も許容されるのではないかと思われる。

- (102) 私は弟から、①「父さんが怒っている」と、②「カンカンだ」と聞いて、急いで逃げ出したよ。
- (103) 私は手紙に、①「もう戻りません」と、②「私のことは忘れて下さい」と書きました。

こうした表現は古代語においても許容されていた可能性はあるが、本稿では発言・思惟の内容が現れやすいという事実の指摘に留めたい。

#### 4. まとめ

本稿では、引用句「～と」が接続する形について分類と考察を行った。

まず、現代語において1つの述語に対し2つの引用句が現れる文は、次の4種の構造で成り立つ。

- (A) 1つ目の引用句を言い直すことによって2つ目の引用句が直後に接続して現れるもの
- (104) しかし、ぼくたちは①大平さん目を開いたなと、②見開いたなと思っているわけですよ。(参議院・1980年2月14日)
- (B) 第Ⅱ類引用構文の述部にさらに引用構文が組み込まれるという重層的な構造のもの。
- (105) [アジア系外国人を支援する自宅を]「個人の名刺より効果があるはず」と「アジア友好の家」と名付けた。(毎日新聞・1995年9月9日)
- (C) 等位構造縮約によって1つ目の引用句を承ける述語句が消えているもの。
- (106) ちなみに由紀と彩も誘ったのだが、由紀には「…用事が有るから」とゆ、彩には「ごめん！委員会が有るから先帰ってて!」と、見事に断られてし

まった訳だ。

(タラちゃん「高校生の恋愛」)

(D) 1つの事態を描写する分において副詞的成分が接続する表現の一環として、1つの発言・思惟の内容を2つの引用句で分割的に提示するもの。

(107) ①ともかく金貸せと、②あとはおれを信じろと言っても、なかなかこれは国民は信じることができないと思うんですね。(参議院・1972年6月10日)

(A)・(B)・(C)・(D)のうち、(A)・(B)・(D)は引用句が接続する形になるが、(C)は他の成分((107)波線部)が2つの引用句の間に割り込んで生起するため、引用句が接続する形にならない。

古代語において引用句の接続する例は、現代語で見た構造のうち、(A)の例は見出せず、(B)の例が僅かに見られる他は、全て(D)の例と判定できた。

<(B)の例>

(108) [右近は、句宮が浮舟のもとに残り続けるのを苦々しく思いつつ、周囲に知られないよう策を講じている。] [右近は] あやにくに殿の御使のあらむ時 [=こんな時に折悪しく殿(薫)の使者が来たら] いかには言はむと、「初瀬の観音、今日事なくて暮らしたまへ」と、大願をぞ立てける。

(源氏・浮舟・6-129)

<(D)の例>

(109) 大和守、残りのことどもしたためて、「かく心細くてはえおはしまさじ。いと御心の際 [= 悲しみの紛れる暇] あらじ」など聞こゆれど、[宮は] ① なほ峰の煙をだにけ近くて [母を] 思ひ出できこえむと、 ② この山里に住みはてなむと思いたり。

(源氏・夕霧・4-443)

以上のように分類整理できることが本稿の結論であるが、これまでの検討を通して、「～と」が「～を」「～に」などの格成分とは異なり、副詞的成分として機能する点が鮮明になった。従来、引用句を作る助詞トについては、格助詞に分類する立場と、格助詞とは区別して引用助詞などとする立場とがあったが、本稿で述べたことは後者の妥当性が高いこと示していると思われる<sup>15</sup>。

<sup>15</sup> ただし、引用語句をマークするように見える助詞「と」を、一概に全て引用助詞とすることもできない。阿部(2001)では、「AをB【と/だと】思う」のようにヲ格成分を取るタイプの構文(認識動詞構文)における「と」に関して、断定の助動詞ダの生起に着目し、引用とは異なる働き(名詞句Aと名詞句Bを同一のものとして結びつけるコピュラの働き)を持つ場合があることが示されている。なお、古代語においても名詞句Aと名詞句Bによる認識動詞構文「AをBと思ふ」の例は多く見出されるが、断定の助動詞ナリが生起する「AをBなりと思ふ」の形は稀なようである。この点については別の機会に考察したい。

## 参考文献

- 青木伶子(1994)「格助詞の範囲―「目標格」をめぐる―」『成蹊人文研究』2 pp. 73-86
- 足立慶子(1970)「源氏物語の会話表現―引用の形式と実態―」『王朝』2 pp. 161-209(王朝文学協会)
- 阿部二郎(2001)「「AヲBダト思フ」「AヲBト思フ」」『日本語と日本文学』33 pp. 14-24(筑波大学国語国文学会)
- 加藤昌嘉(2006)「「と」の気脈 平安和文における、発話/地/内心の境」『詞林』40 pp. 14-28(大阪大学古代中世文学研究会)
- 加藤陽子(2010)『話し言葉における引用表現―引用標識に着目して―』くろしお出版
- 金田章宏(1993)「「二重」表示現象をめぐる―八十島三根方言を例に―」仁田義雄編『日本語の格をめぐる』くろしお出版 pp. 163-189
- 金賢娥(2012)「「NP1ヲNP2トV」型の名詞句解釈と副詞共起制限」『筑波応用言語学研究』19 pp. 47-59
- 金榮敏(2006)「格重出構文に関する認知論的考察」『日本学報』67 pp. 1-12(韓国日本学会)
- 佐伯暁子(2009)「平安時代から江戸時代における二重ヲ格について」『国語と国文学』86-4 pp. 54-69(東京大学国語国文学会)
- 新屋映子(1995)「格助詞の重複について」窪田富男教授退官記念論文集編集世話人編『日本語の研究と教育 窪田富男教授退官記念論文集』専門教育出版 pp. 11-26
- 竹内史郎(2005)「上代語における助詞トによる構文の諸相」『国語語彙史の研究』24 pp. 167-184
- 辻本桜介(2014)「現代語のトと中古語のトテに関する引用述語の省略という分析について」『日本語学論集』10 pp. 36-69(東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室)
- 中村暁子(2002)「「～ニ～ニ」構文の存在と用法」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』13-1 pp. 83-99
- 中村暁子(2003)「「全体一部分」関係を表す二重ヲ格構文―「～ノ～ヲ」文との比較をめぐる―」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』15 pp. 163-173
- 中村幸弘・碁石雅利(2000)『古典語の構文』おうふう
- 藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院
- 藤田保幸(2001)「文法論としての日本語引用表現の研究のために―再び鎌田修の所論について―」『滋賀大学教育学部紀要』50 pp. 85-104

調査資料(引用に際し、漢字・ルビ等の表記を改めた箇所がある。)

- 古代語――蜻蛉日記・浜松中納言物語・夜の寝覚・狭衣物語・栄花物語・今昔物語集：日本古典文学大系(国文学研究資料館「大系データベース」を利用した)／竹取物語・伊勢物語・土佐日記・平中物語・落窪物語・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・堤中納言物語：新編日本古典文学全集(国立国語研究所「日本語歴史コーパス」を利用した)／宇津保物語：室城秀之他編(1999)『うつほ物語の総合研究 本文編』勉誠出版
- 現代語――《コーパス》BCCWJ：国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(コーパス検

索アプリケーション「中納言」を利用した)《小説》小説を：無料小説サイト「小説を読もう！」(<http://yomou.syosetu.com/>) 公開の投稿作品《会議録》参議院・衆議院：国会会議録（国立国会図書館「国会会議録検索システム」を利用した）／東京都議会：「東京都議会 会議録の検索と閲覧」（<http://asp.db-search.com/tokyo/>）《電子掲示板》したらば掲示板 (<http://rentalbbs.shitaraba.com>) ／価格.com (<http://kakaku.com/>) ／OKwave (<http://okwave.jp/>) 《新聞》琉球新報 (<http://ryukyushimpo.jp/>) ／毎日新聞：「CD-毎日新聞」

(つじもと おうすけ 大学院人文社会系研究科 博士課程1年)